
はっぴーでいず！

SALT

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

はっぴーでいず！

【Nコード】

N6671Q

【作者名】

SALT

【あらすじ】

平等な幸せなんてない。

そう思っていた少年は、ある日少女に出会う。

少女は少年の持論を認めず、その考え方を変えるために、自身の作ろうとしている「幸せクラブ」に招待する。

暇つぶし程度の気持ちだった少年は、そこで大切な何かを学んでいく。

プロローグ（前書き）

この物語はフィクションです。

プロローグ

平等な幸せなんてものは、ありえるのだろうか。
いや、きつと存在しないだろう。

例えば、餓えに苦しむ人々。

例えば、戦争に駆り立てられた人達。

例えば、身寄りの無い子供達。

不幸な人なんて、探せばいくらでもいるだろう。

だが、幸せな人はどうだ？

きつと、胸を張って「自分は誰よりも幸せだ」なんて言える人は
そういないだろう。

誰もが平等に幸せを持つことはできない。

幸せな人がいれば、不幸な人もいる。

それが現実だ。

では……幸せとは何だろう。

不幸とは何だろう。

その問いに、俺は答えることができない。

自分自身、「幸せ」なんて物を理解などしていないのだ。

幸せとは何だろう？

分からない。

不幸とは何だろう？

分からない。

俺は今、幸せか？

……分からない。

俺は誰かを幸せにできるだろうか？

……分からない。

繰り返す自問自答。

ふと思うことを質問してみる。

分からない、と答える。

さつきと同じことを質問してみる。
俺はやはり、分からないと答えた。
どんな質問も、分からないとしか答えなかった。
俺は、自分のことを幸せだとは思っていないようだ。
平等な幸せがあるとも思えない。
だが、それは仕方のないことだ。
平等な幸せを、運命が許してくれなかったのだから。

「志人、朝だよ」

「ん……？」

名前を呼ばれ、重たいまぶたを開く。

「朝だよ？ ご飯、できてるから着替えて下に来てね」

すごく可愛い女の子　　っぽい少年が俺のことを覗き込んでいた。

「……おはよう、太吉」

「うん。おはよう、志人」

笑顔で返事をする限りなく女の子っぽい顔立ちをした少年は、風かが
宮太吉。
ざみやたいち

俺と二人でこの家に暮らしている、俺の幼馴染だ。

「じゃ、下で待ってるから。早くしないと遅刻しちゃうよ？」

「……ああ、分かった」

会話を終えると、太吉は部屋から出て、階段を下りていった。
時計を見ると、結構な時間だ。

「……起きなきゃな」

俺は足早に着替えてから、部屋を出て行った。

階段を下りて顔を洗い、おいしそうな匂いが漂う居間へと向かう。
居間のドアを開けると、食卓の上に一人分の朝食が置いてあった。

「あ、テーブルの上にあるご飯、食べちゃってね」

鞆を背負った太吉が言う。

「太吉はもう食ったのか？」

「うん。今日、日直だから。もう行くけど、遅刻しちゃうだめだよ？」

「ああ、いつてらっしゃい」

太吉は「行ってきます」と言ってから家を出た。

俺は太吉を見送ったあと、椅子に座り、朝食を摂ることにする。

テーブルにはご飯・味噌汁・焼き魚という、朝には丁度いいヘルシーな料理が並んでいた。

「いただきます」

呟いて、食べ始める。

「……今日もうまいな……」

太吉の料理の腕は中々のもので、下手な料理人よりは上なんじゃないかと思えるぐらいだ。

太吉は顔だけではなく、趣味や特技も女の子で、家事やら裁縫やら何でもできる。

きつと、そこらへんの女子よりいいお嫁さんになれるだろう。

「……ごちそうさまでした」

手をあわせ、言う。

「つと、時間やばいな」

食卓を片付けると（水につけておくだけだが）、玄関に置いてある鞆を取り、家を出た。

俺や太吉の通う学校は、家の近くの商店街を抜けた先にあり、歩きだと少し時間がかかるのだった。

知り合いやよく行く店の店主にあいさつをしながら歩く。

商店街の出口に差し掛かった時、猫の鳴き声が聞こえた。

「……向こうからか……？」

普段なら無視するのだが、何故だか気になってしまい、路地裏に進むことにする。

猫の鳴き声が近づく。

路地裏の奥には少し開けたところがあり、そこに子猫たちが集まっていたのだった。

その中心にいるのは……女の子。

俺と同じ制服を着ていた。

「あれ？ ボクと同じ制服だ」

少女は不思議そうに俺を見つめる。

「学校はこっちじゃないよ？ 迷ったの？」

「……地元で迷うわけねえだろ」

「違うの？」

少女が首をかしげて聞いてくる。

「違う」

「そっか。……じゃあさ、道を教えてよ」

少女が唐突に言う。

「は？」

あまりに急だったので、間抜けな声を出してしまふ。

そんな俺を見て、少女は続ける。

「ボク、引っ越してきたんだ。でも、学校の場所、分かんなくなっちゃって。猫と遊んでたの」

「遊ぶなよ……」

「とにかく、早くしないと遅刻しちゃうでしょ？ 行こうよ」

少女が立ちあがる。

「……勝手にいい」

「ありがとう」

商店街から出て、歩く。

「あ、自己紹介してなかったね。ボクは幸坂幸^{こうさかきさち}。君は？」

「……桜ヶ崎志人^{おうがさきしと}」

「志人君か。よろしくね、志人君」

幸が手を差し出す。

「よろしく、幸坂」

握り返し、握手をする。

「じゃあ、さっさと行こう！」

二人で学校へと歩いた。

学校に着いた時、なんとなく思った。

……これから、いいことがあると思うだ。

第一話

「やっと着いた……」

俺はため息をつき、隣で校舎を見上げている少女に睨みを利かせる。

「この学校、遠いんだね。毎日通うのが嫌になるよ」

「普通ならあと1時間以上早く着くからな」

俺はポケットから携帯を取り出し、画面の右上を見た。

携帯には9：30と表記されている。

ちなみに、朝のHRが始まるのは8：30だ。
本ルーム

「盛大な遅刻だな……」

「なんか大変そうだね」

幸坂が他人事のように俺の顔を覗き込む。

「お前が道の猫にホイホイついていかなきゃ、何も問題なかったんだが」

幸坂が道で猫を見つけたらについていこうとするので、連れ戻すのに時間がかかりまくったのだった。

初めてこの辺りの猫の多さを呪ったぞ……。

「まあまあ、早く行こうよ」

「……言っとくけど、お前も遅刻だからな」

言いながら校舎へと入る。

階段を上りながら、そういえば、と幸坂に話しかけた。

「お前、何年だ？」

「ふえ？」

「学年だ、学年。あとクラス」

幸坂は少し考えてから、思い出したように言う。

「2年B組だよ？」

「……同じじゃねえかよ……」

言っと、幸坂は目を輝かせた。

「ほんと!? よかったあ!」

幸坂はびよんぴよん飛び跳ねている。

「……何がそんなにうれしいんだか」

あまり喜ばれると少し照れくさい。

「遅刻が二人もいたら、少し心強いよね!」

「……そんなことかよ!」

少し、というかなんり脱力した。

そんなことを言っているうちに教室にたどり着く。

ドアのプレートには「2-B」と書かれている。

教室の中からは担任教師の声が聞こえていた。

「そっぴや今日、LHRロングホームルームだったっけ」

少し肩の荷がおりた気分だ。

ドアに手をかけ、少し息を吸ってからドアを開ける。

「ちーっす」

「おう、志人か。おはよう……っっておせえぞ」

教卓に手をつけてさっきまで喋っていた人間……つまりはこのク

ラスの担任である、かみてしゅうじ神手修二が言う。

「まあまあ。それより、迷子を連れてきたぞ」

「迷子? ロリータな感じのお子さんでもいたのか?」

修二が目を光らせる。

「いや、違うけど」

「何だよ……違うのかよ……」

やめる修二、そんな本気がつかかりした表情を見せるな。お前を

教師かどうか疑ってしまっじやないか……。

「転校生だよ、転校生」

「……ああ、そうだった、そんなのがいたな」

修二はそう言って教卓に向き直る。

「というわけで、今日からこのクラスに仲間が増える。皆、仲良くな」

修二が月並みな台詞を言うと、クラスがざわつき始めた。

そんなクラスの様子を眺めていると、窓際の席に座っている太吉と目が合う。

なんとなく不機嫌そうな目をしていた。
きつと、俺が遅刻したからなんだろうな……。
とつさに目をそらした。

「……修二、自分の席についていいか」

「よし、迷子の転校生を連れてきたことだし、今日は遅刻のペナルティはなしだ！」

……今まで遅刻したところにペナルティをくらった覚えはないけどな。

「よし、転校生、入れ！」

「はい」

幸坂の声。

自己紹介を始めた幸坂をよそに、俺は自分の席に着く。

一番後ろ、窓際の席。目の前には太吉の後頭部。

……があるはずだったんだが。

今俺の目に映っているのは、太吉の不機嫌そうな目だった。

黙ってるせいで何となく怖い。

「……太吉、前向けよ……」

「……そうだね」

太吉はそれだけ言うと、ゆっくりと前を向いた。

……後で何か言われるだろうなあ。

そんなことをしている間に、幸坂の自己紹介が終わっていた。

「それじゃあ、幸坂の席は……」

修二がそういったとき、幸坂と目が合った。

「あ！ 君はさっきの……！」

俺を指さし、幸坂はそんなことを言う。

「いやいや、何お約束っぽいこと言ってるんだよ！ 一緒に学校まで来て、さっきまで隣にいただろうが！」

「おっ、知り合いだったのか。じゃあ席は隣でいいな」

つづけて修二もそんなことを言う。

「おいコラ修二、何流されてんだよ！ お約束っばい」と言わなくていいし、俺の隣空いてねえから！」

「えっ、まじで？」

確認しろよ……。

「いや、ごめんね。ちょっと今の台詞、言ってみたくて……」
頭を掻きながら幸坂が言う。

「……よし、仕切りなおした。幸坂の席は……」
修二がそう言った時。

俺の隣の席に座る男が手を挙げた。

「僕と志人との間、つてのはどうだい？」

そう提案したのはジョン・カルロス。

アメリカから来た白人の生徒だ。

「……どういうことだ？」

「言った通りさ。僕の席と志人の席の間に、幸坂さんの分の机を置くんだよ」

「お、それいただき」

修二がジョンを指さす。

「いや、ちよつと待てよ」

そんな滑稽な状況を教師が認めるものだろうか。

「面白そうじゃん？」

「……もついいや……」

修二は教師ではない。そういうことにしておこう。

「で、ボクの席はそこでいいのかな？」

幸坂がいつの間にか用意されていた、俺とジョンの席の間にある席を指差す。

「どうぞプリンセス」

ジョンが手招きをする。

……どうでもいいが手招きとその台詞は死ぬほど合っていないぞ。

「うん、よろしくね！ えっと……」

「ジョン・カルロス。ジョンと呼んでくれて構わないよ、プリンセス」

「よろしくね、ジョン君」

「よろしく、プリンセス」

挨拶を済ませたところで、LHR終了のチャイムが鳴る。

「よし、休み時間だ。次の授業の準備、しとけよ」

それだけ言つて、修二は教室を出て行った。

それと同時に、幸坂の席の周りに人だかりができる。

当然、机が密着している俺とジョンも巻き込まれるのだった。

……今日一日、疲れそうだ。

……朝のワクワクした気分なんて忘れてしまっそうなほどに。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6671q/>

はっぴーでいず！

2011年2月13日00時10分発行